

## 76 出土した中国古代医学文物（展示）

## 猪飼祥夫

北里研究所・東洋医学総合研究所医史学研究部

中国の古代の医学は、『漢書芸文志』（七十八年（建初三年））によれば医経、経方、房中、神僊の四種に分類されている。この分類は漢の劉向・劉歆父子の手になる「七略」に基づいて班固が書いたものである。今日の医学概念で分類すれば、医経は鍼灸と薬方原理によるものである。経方は、特定の疾病に臨床的な薬方をどのように用いるかを、気味や寒温、疾病の深淺などによって考えるものである。さらに戦争による外傷の感染の処置や婦人科小児科なども含まれる。また食事を管理する食医のテキストなどもふくまれる。房中は現代の性医学の分野がこれにあたる。性行為の方法だけでなくインポテンツや男子を得るための妊娠法なども含まれる。神僊は、導引按摩やウォーキング、茸などの不老長寿の食品などである。今日では医学の

分野からはなれて養生に類するものであるが、この時代においては医学の重要な分野であった。

出土文物にこれらの分類を応用すると、医経は鍼灸の工具の原物や鍼灸文献の原典などが出土している。工具では河北省の満城漢墓の中山王劉勝の墓から出土した金鍼、銀鍼、医療用の盤、砭石などが有名である。湖南省長沙市の馬王堆や湖北省の張家山からは、鍼灸の古典「靈樞」「経脈」の祖本である「陰陽十一脈灸經」や「脈書」が出土している。馬王堆の「足臂十一脈灸經」も傍系の鍼灸文献として注目されている。四川省の綿陽県の永興鎮の双包山からは経絡が図示されたと思われる漆木人形が出土した。さらに湖北省の雲夢県の睡虎地で出土した「封診式」という竹簡は、事件の捜査検証の書式の例文であり、診断学や法医学に関係があると思われる。

経方では、薬物の現物が出土している。また処方を書いた文献もあった。薬物では、馬王堆漢墓や広州南越王墓から漢方薬処方によく使われる薬物が発見された。さらに馬王堆の処方集「五十二病方」には約二八

○の処方がある。甘肅省の居延漢簡や武威の漢代医簡には処方書かれた木簡や竹簡が知られている。

房中では、性医学の文献が馬王堆で出土しただけでなく、満城漢墓、明珠新家園漢墓では性の用具が埋葬されていた。馬王堆の『養生方』『雜療方』『胎産書』『十問』『合陰陽』『雜禁方』『天下至道談』と名付けられた文献類が、房中書あるいは房中に関係のあるものである。満城漢墓の性具では、女性どうしで使われたと思われるものまで含まれていた。睡虎地秦墓竹簡には、ある事件後腹痛流産の状況を尋問した調書がある。ここでは、妊娠月数の正しい把握がなされている。

神僊では、『導引図』が馬王堆から出土し、張家山では『引書』という導引書が出ている。そこには呼吸法なども記述されている。また『漢書芸文志』では辟穀の文献がこれに含まれるかどうか明らかではないが、張家山や馬王堆では辟穀の文献が確認されている。また水銀などの金属も多く出土している。これらは不老不死をめざす薬物として煉丹術につかわれたものである。『漢書芸文志』の分類に含まれないものに、祝由に

使う文献が含まれる。これは病氣平癒を願う呪詛であり、秦駟禱病玉版がその代表である。

これらの出土した医学文献を写真で展示復元し、中国古代医学の全体像をできる限り明らかにするつもりである。